

# 学生運動の階級的発展をめざそう！

1987. 12/9

# 学生運動の階級的発展をめざそう！／

## 目次

・パンフ発行にあたって――我々の立場	1
1章. 階級闘争と学生運動	
1. 階級闘争観の獲得に向けて.	3
2. プロレタリアートの階級形成と諸階級・諸階層.	4
3. 種々の“学生運動論”について.	6
2章. 政治闘争と学園闘争の相互関係について	
1. 原則的な政治闘争観の復権のために.	9
2. “学園闘争論”をめぐる.	11
3. 政治闘争と学園闘争の結合にむけて.	14
3章. いわゆる“個別闘争”の結合と発展をめぐる	
1. 民主主義問題へのプロレタリアートの態度.	15
2. 政策批判―政策阻止闘争に階級闘争を狭めてはならない.	17
3. プロレタリアートの革命的内実を打ち鍛えよう！.	18
・最後に.	19

△パンフ発行にあたって——我々の立場▽

未だ学生運動は、70年代以来の長い混沌状況から抜け出し得ていない。もちろんそれは、一人学生運動のみの問題ではなく、80年代末〜90年代初め政府・権力問題に直面するまでに成長しながらも、そうした任務に答えきれず、運動を牽引してきた先進的な党派が分解・解体を繰り返し、階級闘争総体が後退を強いられてきた現実に規定されたものである。政策反対運動、諸民主主義闘争の大衆的發展の延長上に「革命」を展望する政治は、まさに激烈な階級闘争の鉄火の中で、その限界を暴露された。

ブルジョアジーへの急進主義的反対派にとどまることなく、ブルジョアジーにとってかわるプロレタリアートの前衛性・権力を組織し、資本主義を廃絶していく指導能力を形成していくことが求められていたのである。これは、諸民主主義闘争の發展が自然成長的に生み出すものではないし、諸課題の接ぎ木による「みちすじ」の指定といった貧困な革命観によって育成されるものでもない。また直接労働者大衆に依拠することや、労働運動に階級闘争の基盤をおくことそれ自体で解決される問題でもない。彼岸化されたプロ独・共産主義を、現実の運動に貫徹すること、現実の運動の中で、プロ独・共産主義を根本的・目的意識的に準備し組織していくこと、そのような政治の実現と、そのための理論・組織の転換が焦眉の課題となったのである。

当時、こうした任務に応えるための苦闘はブント左派潮流（赤軍派、12・18ブント等）によって試みられたものの、国家権力の重包囲の下で挫折を重ねた。

ブント左派潮流の闘いを主体的に引き受け、総括していく中から、真に革命的な党を創建せんとする事業を我々は支持する。それが、学生運動を含めた階級闘争の混沌状況を突き破っていくために不可欠の課題であると判断するからである。

学生運動といえども、少なくとも自覚的活動家は、運動の終局目標を労働者階級の経済的解放を通じた一切の社会的搾取・抑圧・差別の廃絶におき、これを実現せんとする階級闘争総体の中で自らの任務をとらえ返すことで、運動の統一的發展を促進していくことが、客観的に要請されている。しかし、まさにその階級闘争総体が、プロレタリアートの経済的解放とその他のプロ独権力の内実、これを現実の運動に貫徹させる路線の中味の貧困故に、後退を強いられてきているのである。だからこそ我々は、この課題に真正面から応えぬかんとする党建設の闘いを支持する。そして、そうした闘いと相互関係をもって、学生運動の根本的総括をなしきり、新たな学生運動の進撃を組織すべく奮闘していきたい。

このパンフは、我々の取り組みの第一歩である。学生活動家諸君との討論・豊かな論争を組織していくために我々はこのパンフを発行する。

学生運動が、階級闘争という観点から語られ、種々の運動論が存在してきた。インテリゲンチヤ、同盟軍規定、先駆性、等々。このことが、個別学園での運動という限定された視点を越え、普遍性を指向し、階級闘争の発展に貢献しようとしている点は、評価されなければならない。

しかしその意図にもかかわらず、諸々の運動論が、学生運動の自然発生性に意味付与を行うものとしての性格を色濃くもっていたこともまた事実である。このことは、階級闘争における原則的領域での混乱が、大きく原因していると考えられる。この混乱は、自然発生性を「階級闘争」「プロレタリアートの利害」という名で裁断・統制するといった事態を通して拡大再生産され、運動の中に不信とドグマを植え付けてきた。

このような現実をふまえるならば、学生運動の階級的発展をめざす我々にとって、階級闘争に対する基本的視座を確認しておく作業は、小さくない意義を持つものと考ええる。我々は、ここから始める。

### 1. 階級闘争観の獲得に向けて

資本主義社会は、ブルジョアジーとプロレタリアートの階級対立の社会である、と言われる。しかし、その内容は

もの全てがプロレタリアートとしてとらえられてしまい、階級闘争概念そのものが喪失されてしまう。

もちろん、彼らもこの点に全く無自覚だというわけではない。彼らなりに、プロレタリアートを経済学的に規定し、つなぎとめようとする。資本主義の運動の一部（その運動の結果でありかつ原因）としてある労働力商品化を、資本主義の根本矛盾として設定し、この現象を「人間が、非人間的な商品としてあつかわれること」と解釈して、論理的接合を行っているのである。

彼らが、急進民主主義（人間性の激的発現）プロ独の内の欠落（と組合主義（労働力商品としての自覚の促進）との間を揺れ動いてきたのは、ここに因している。

我々は、このようなものとして階級関係をとらえることはできない。

そもそも、資本主義のあれこれの矛盾を取り出して、そこから階級関係を全面的に規定するようなことはできない。これでは、階級関係は資本の運動の静的な一断面の中で、固定的かつ部分的なものとしてしかとらえられなくなってしまう。そして階級形成—階級闘争も、そうした矛盾を軸に自然発生する諸闘争の直接延長上にその発展を見てもまうことになる。その典型的な例が、職場での経済闘争の延長にプロレタリアートの解放を展望するいわゆる経済主義の立場である。このようなとらえ方からは、プロレタリアートの階級形成とその革命性は決して明らかにならない。資本主義は、資本制生産関係を基礎としながらも、この

様々であり、多くは、階級関係を有効にとらえていない。このことは現在、「プロレタリアート」「階級闘争」という言葉さえ後景化させることに結果している。この深刻な事態を突破するためにも、代表的な見解の検討からはじめていきたい。

まず、社民をはじめ一般的に理解されている見方である。これは、資本主義を直接的生産過程における不平等な分配—搾取としてとらえ、ここにおける生産手段に対する係わり方のみをもって階級関係としてしまうものである。ここでは、即時的な労働者それ自身が革命的な階級としてとらえられてしまい、階級対立も狭い労使関係の中におしこめられることになる。彼らの想定する「社会主義」—プロレタリアートの利害とは、労使関係における平等な分配の実現であり、プロレタリアートの階級闘争はかくして組合の経済闘争へと収斂される。彼らの階級形成はせいぜい、この労使間の「搾取のしくみ」を啓蒙することであり、政治闘争は二義的意味しかもちえないことになる。

また、疎外論をもって階級関係をとらえる部分がある。彼らは、階級関係を「人間性の疎外」を基準に、疎外されるプロレタリアート、非人間化されるプロレタリアート↑↓抑圧するブルジョアジーという把握を行う。彼らの立場が、スターリニズムの官僚支配の「非人間的現実を告発する地点で確立されたものとはいえ、その一面性・アイマイさ」は否めない。そもそも、人間性なる概念を超階級的に想定することが可能なのか。ここにおいては、抑圧される

関係（ブルジョアジーによる生産手段の占有とプロレタリアートの隷属）自体を再生産する全社会的運動である。ブルジョア階級は、この経済的運動すなわち、

「自分自身の取得の諸条件に全社会をしたがわせることによって、自分のすでに獲得した生活上の地位を確保しよう」とつとめ」（『共産党宣言』p41）

ているのである。階級支配は、このように全社会的に貫徹されているのであって、決して労使関係に切り縮められる類いのものではないのである。

資本主義は、生産力を拡大すると共に、革命的階級を生み出してきた。プロレタリアートが自らを解放することとは、資本制生産関係—社会関係の下でのブルジョアジーへの隷属の直接の強制力としてあるブルジョア国家を解体し、プロレタリアートの権力へとつたかえること、そしてその下で、国家・階級の廃絶の経済的基礎を打ち立てるといふ、世界的任務にまで到達することである。

このようなプロレタリアートの階級闘争、階級そのものの廃絶まで進まざるをえない解放の性格、その全面性において、プロレタリアートとブルジョアジーは非和解的対立を全社会的に形成しているのである。

### 2. プロレタリアートの階級形成と諸階級・諸階層

経済的利害、解放の条件をめぐる階級対立の非和解性・

全面性について、以上見てきた。しかしながら、現実の労働者大衆が必ずしも革命的に闘いえていないわけではない。そこには労働者大衆を単一の階級へと形成するという困難な事業が横たわっているのである。

マルクスにおける階級—階級形成の意味を見ておきたい。「個々の諸個人は、彼らがある他の階級に対して、共同の闘争を行わねばならない限りにおいてのみ、一つの階級を形成する。」(『ドイツ・イデオロギー』p.135)

「経済的諸条件がまず第一に、国民大衆を労働者に転化させたのである。資本の支配が、この大衆のために、共通の—地位、共通の諸利害関係をつくり出した。かくして、この大衆は資本に対してはすでに一つの階級である。

しかし大衆自身のためにはまだ一つの階級ではない。我々はその若干の局面だけを指摘したところの闘争において、この大衆は結合する。大衆自身のための階級に自己を構成する。」(『哲学の貧困』p.231、傍線—引用者)

「ブルジョアジーすなわち資本が発達するに比例して、プロレタリアートすなわち近代労働者の階級も発達する。「個々の労働者と、個々のブルジョアとの衝突はますます二つの階級の衝突の性質をおびてくる。労働者はブルジョアに対抗する結合をつくりはじめめる。」—彼らの闘争の真の成果は、直接の結果にはなく、労働者の団結がますます拡大することにある。」—この、階級への、それとともにまた政党への、プロレタリアの組織化は、労働者自身のあいだの競争によってたえずくりかえしう

る。

このことについて、再びマルクスの提起を受けよう。

「今日、ブルジョアジーに対立しているすべての階級の中で、ひとりプロレタリアートだけが真に革命的な階級である。その他の階級は大工業とともにおとろえ没落する。プロレタリアートは大工業のもっとも特有な産物である。

中産身分、すなわち小工業者、小商人、手工業者、農民、これらがブルジョアジーとたたかうのは、すべて中産身分としての彼らの地位を没落から守るためである。」(『共産党宣言』p.40)

現在の傾向は、資本主義が独占を生み、帝国主義段階に至るにあたって、ますます大きくなっている。帝国主義は、政治反動をその特徴の一つとしており、大独占ブルジョアジーによる階級支配は、小ブル諸階層をも疎外し、プロレタリアートへと没落させる傾向を拡大させる。小ブル諸階層は、大ブルジョアジーとの矛盾を深めることにより、自然発生的には、没落から自らの地位を守るために政治反動に対して、民主主義、すなわち非独占・自由競争段階の資本主義を要求する。しかし資本主義に独占を排除せよと要求することは、非現実的であり、反動的ですらある。

「もし彼らが、革命的になるとすれば、それは彼らが、自分らがプロレタリアートへ移行する日のせままっていることを見てのことである。そのばあいには彼らは、彼らの現在の利益ではなしに将来の利益をまもっているのであり、彼ら自身の立場をすててプロレタリアートの立場

ちくだかれる。だが、それはいつも、いっそう強力な、いっそう強固な、いっそう有力なものとなって復活する。」(『共産党宣言』p.35~39)

ここに洞察されていることは、歴史的な、資本主義の発展との関係において、ブルジョアジーとの闘争の中で形成されて行くプロレタリア階級である。そして『共産党宣言』においては、資本主義が生み出し、闘争をへて発展してきたプロレタリアートが、ついに階級として独自の政党を組織するに至ったことを鮮明にうかがわがらせ、ここから逆に「プロレタリアートの階級への形成、ブルジョアジーの支配の転覆、プロレタリアートによる政治権力の獲得」(同前p.45)を共産主義者の当面の目的として設定しているのである。

マルクスは、ア・プリオリに、定在的に、プロレタリア階級を語ったことはなかった。このようにプロレタリアートを、ブルジョアジーとの階級闘争の中で動的に把握してはじめて、労働者大衆を階級に形成するというこの意味が明らかになってくるのである。

次に、プロレタリアートの階級形成と諸階級・諸階層との関連についてみておかなければならない。ブルジョアジーとプロレタリアートとの二大階級への分裂をその特徴としている資本主義社会において、その他の階級、すなわち中産身分は、プロレタリアートの階級闘争においていかなる意味をもっているのか。

に立っているのである。」(同前p.41)

つまり、経済的には中産身分であっても、没落しつつある自己、また革命的な階級としてのプロレタリア階級の立場を洞察することができらば、プロレタリア階級闘争の一部を担うことができるということである。

社会生活上の地位が、必ずしも政治生活上の位置に直結するわけではない。

であればこそプロレタリアートは、このような動揺する中間階層を、より多く革命的な隊列に引き入れていくために、なによりも自己の独自の階級の利害と、これを実現する独自の政治と組織の建設を鮮明に押し出していかなければならない。種々の政治反動との闘争においても、「歴史の車輪を逆に回そうとする」小ブル的傾向ときっぱり分岐し、彼らの没落の不可避性を暴露しながら、この闘いを、プロレタリアートに向けた闘いに従属・結合させていくという態度を貫くことを忘れてはならない。

階級的に未分化な、学生層の運動においても、その闘いの階級の発展をめざすとき、以上の観点は踏まえておくべきものとしてある。

### 3. 種々の学生運動論について

以上見てきた階級闘争観との関連で、歴史的な種々の、学生運動論について、若干の検討を試みることにする。





労働者の闘いにおいて、政治闘争と経済闘争の結合が重要なポイントになってきたように、学生運動においても、政治闘争と学園闘争の結合の問題は、多くの活動家によって論じられてきた。しかしながらこうした指向は、未だ抽象的な指向性一般にとどまっているか、表層的な接ぎ木や、主観的な意味付与に終始しているのが現状であろう。

この問題を考えていくにあたって、我々はまず、政治闘争の中味―階級闘争における意義―を検討していくことから始めていきたい。政治闘争の内実をめぐって、党派闘争・路線闘争が不断に闘われてきた階級闘争の歴史を見る時、そもそも政治闘争一般を語ることはできないと判断するからである。

1. 原則的な政治闘争観の復権のために

マルクス・レーニンの提起に耳を傾けていきたい。

「労働者階級の経済的解放が偉大な最終目的であり、すべての政治運動は手段としてこの最終目的に従うべきであること」(『ゴータ綱領批判』所収 p.162 「国際労働者協会一般規約」)

「プロレタリアートの政治運動は、もちろん、自分たちの手に政治権力を獲得することを終局目標としている。」

「他方では、プロレタリアートが階級として支配階級に立ち向かい外部からの圧力によって彼らに強要しようとする運動は、いずれも政治運動である。」(これ(政治運動―引用者)は、すなわち、普遍的な形、普遍的な社会的強制力をもつ形で、自己の利益を貫徹するための階級の運動である。)(『労働組合論』所収 p.84 「政治運動と経済運動の関連について」)

「階級闘争はすべて政治闘争である。」(『共産党宣言』 p.36)

以上マルクス。以下レーニン。

「経済的利益が決定的な役割を演じるからといって、したがって経済闘争(労働組合闘争)が第一義的な意義をもつという結論には、決してならない。なぜなら諸階級の最も本質的で『決定的』な利益は、一般に根本的な政治的改革によってはじめて満足させることができるからである。」(『なにをなすべきか?』 p.74)

「階級的政治的意識は、外部からしか、つまり経済闘争の外部から、労働者と雇い主の圏外からしか、プロレタリアートにもたらすことができない。この知識を汲みとってくることでできる唯一の分野は、すべての階級および層と国家および政府との関係の分野、すべての階級の相互関係の分野である。」(同前 p.121)

「たんに政治をとらえることだけではなく、政治において最も本質的なもの、すなわち国家権力の構造をとりあげるにはじめて階級闘争を完全に発達した、『全国

民的』な階級闘争とみなす。」(『階級闘争の自由主義的概念とマルクス主義的概念についての覚え書き』―全集第十九巻 p.113)

これらの引用から、マルクス・レーニンが、政治闘争をどのようなものとして扱っていたのかを読み取ることができよう。階級としての普遍的利害は、政治闘争として体现され、政治闘争によって実現されること。逆に言えば、政治闘争は、階級的普遍的利害をその内実とし、国家権力の構造をとらえるものとして組織されなければならない、そのような政治闘争こそが、階級形成・階級闘争における核心的位置を占めること。こうしたマルクス・レーニンの主張を、我々は真っ直ぐに継承しなければならないと考える。

ただしそれは、政治闘争Ⅱプロレタリアートの普遍的利害に立脚した闘争、経済闘争・改良闘争Ⅱ個々の労働者大衆の特殊の利害に立脚した闘争、という図式をもって、政治闘争への経済闘争の従属、というスローガンを教条的にふりまわすことではない。プロレタリアートの普遍的利害を実現する闘いが、政治闘争という形をとるからといって、そもそも政治闘争がプロレタリアートの普遍的利害に立脚しているとは言えないからである。この点を見失うなら、政治闘争の中味は、どれだけ戦闘的に闘うか、どれだけ大衆性を獲得するか、そのためにどの課題を選ぶか、といった問題に矮小化されざるをえない。それだけではなく、経済闘争・改良闘争への政治利用主義的関わりや引き回しを不断に生み出さざるをえない。

こうした誤りは、実際、一定の活動家層に政治不信・党派不信を与えてきている。また、その結果として、経済主義・改良主義的傾向を増幅させてしまっている。政治闘争が階級闘争において、核心的意義を有しているが故に、政治闘争の未熟・限界は、階級闘争に多大な悪影響を及ぼしてしまうのである。

革命的な政治闘争の構築という課題は、ますます重要なものとなっている。我々は、そのような政治闘争の促進・発展という階級闘争の核心的任務の下に、学園・地域など諸領域での闘いを結合させていかなければならない。

言うまでもなくそれは、一定の大衆的広がりや、権力との実力的攻防を形成している種々の政治闘争それ自体に、全人民的政治闘争、等の位置づけ・名称、を与え、その闘いの勝利が革命に直結するといった宣伝・扇動を行うことで、自然発生性に追随しながら権力問題を接ぎ木するような政治とは根本的に異なるものである。そのような政治―権力問題の提起は、直観的で狭いものに止どまらざるをえないし、学園闘争等との結合もせいぜい一面的で都合主義的なものにならざるをえないであろう。

種々の個別性・特殊性と結びついて、日々生起してくる諸闘争を総括し、単一の闘い・単一の陣型へとまとめあげられるのは、ブルジョア国家を正面からとらえ、これをプロレタリアートにとってかえることで、階級支配を廃絶していかんとするプロレタリアートの政治のみである。自然発生性に押され、これを後景化させてしまうことなく、まさにこのこ

とを階級闘争の前面に押し出していくのでなければならぬ。

## 2. 学園闘争論をめぐって

政治闘争との関係において、明確な問題意識をもって学園闘争指導を行おうとしたのは、共産主義者同盟（ブント）である。ブントのスローガンの一つとしてあった「帝国主義的大学再編粉碎！」が、現在も、政治闘争との結合を志向する部分へ受け継がれていることを考え合わせるならば、このスローガンに象徴される、ブントの教育・学園闘争論の検討・総括は、現在の意味をもつものと考えうる。

政治闘争と学園闘争との結合という問題意識は、30年安保後の学生運動の停滞の中で、はじめて形を表す。いわゆる「第三期学生運動論」（『戦士6号』）―社学同関西地方委機関紙―55年発行）である。

この運動論が、現在も学生生活家の間で検討対象とされているのは、学園主義と政治主義の止揚というすぐれて実践的な問題意識に立って、未整理ながらも、豊富な内容を含みつつ、ある程度問題の核心に接近しているからである。「三期論」は次のように述べている。

「これらの社会政治闘争的な学内闘争と日韓（条約―引用者）阻止ヴェトナム戦争の反対の政治闘争との統一し

あったか。残念ながら、「三期論」で問われていた本質的問題へと踏み込む方向へは進まず、逆に戦略主義を体系化してしまうことになる。すなわち、「帝国主義的大学再編論」の完成である。具体的にみてみよう。

「東南アジア侵略反革命を総路線とする日帝は、権力機構の強化と治安弾圧を軸とし、諸階層に対する個別攻撃を帝国主義的全社会的総再編攻撃としてかけてくる。」（『共産主義』二号へ7回大会決定集より―58年6月発行、以下も同じ）

「日帝の侵略反革命に対応して国内政治攻撃の性格が規定される。即ち、国内統治機構を法・軍・マスコミ・教育・産業にわたる全社会的な帝国主義の再編攻撃となるのである。」

「まさに学費闘争が、五十年代の従来の単なる学園闘争から今や、教育に対する帝国主義的攻撃に対する闘い＝明確な政治闘争としてあること。」

「我々は現段階における権力の個別攻撃と個別闘争とを、帝国主義権力の侵略反革命＝総路線に対する闘いへと高めるべき戦略的意識性の下に指導する包括性をもたなければならぬ。帝国主義的全社会的再編に対する闘いは、このようなものである。」

「我々は個別経済諸闘争を帝国主義的再編攻撃を粉碎する意識的闘いに集約し、高めなければならぬ。」

「日帝の危機の外化である東南アジア反革命侵略に対する闘いと、帝国主義的世界的動揺を基底とする大合理化、

た指導性と大衆の中での内在的に統一された反帝の政治意識の形成」が問われている。

「勿論、現在において、これら政治闘争をへ社会政治闘争が現実的に結合し、政治闘争から社会政治闘争へ・社会政治闘争から政治闘争に発展融合する等と馬鹿げた（ママ）ことをいっているのではない。ただ今後の大衆の中での政治的ヘゲモニーの確立は社会政治闘争を抜きにしても、又政治闘争を捨象しても語り得ず、両者の独自の徹底的展開と両者に存在する反帝性が（「の」の誤植か？）両者の独自の徹底性を抜きにしては形成され得ないのである。」

自然発生的に結合しえない↓独自の徹底展開が必要。まったくその通りである。問題はその先である。徹底展開によって獲得すべき内実である。

ここではこれに対して、「反帝性」としか答えていない。これは実践的には、諸闘争を帝国主義の反動政策との関連において暴露―説明することしか意味しない。徹底展開は政策阻止闘争の急進化にまでしかいきつかないのである。この徹底の甘さ、内実の弱さは「日本資本主義の膨張と反革命的諸政策の進行と諸矛盾の集約点としての、第三次安保阻止の政治意識の形成をめざす」といった「戦略」―革命の道すじで埋め合わせることに、結果している。

この論が継承される形で、ブント6回大会（第二次ブント結成大会）、そして7回大会が開かれる。結果はどうで

賃金抑圧に対する闘いを通して、日帝権力を破綻に追いこむのである。帝国主義的統治機構への再編との闘いは、この二つの闘いを結合し、発展させる環である。」

ここでは、政治闘争と学園闘争の独自の徹底展開という問題意識は後退している。かわりに、「学園闘争は政治闘争としてある」という意味付与と、これと「帝国主義の総路線に対する闘い」とを結び、かけはし、としての、「帝国主義的全社会的再編との闘い」という図式が現れる。

しかしながら、このような机上の論理は、現実には通用しない。50年代末、学生大衆運動の自然発生性は、帝大解体、のスローガンを登場させるまでに成長したのである。この中で、ブントは、7回大会の基調を基本的には引き継ぎながらも、指導の転換を志向しはじめた。

次に引用する文は、東大闘争の後に『理論戦線』8号（社学同機関誌―58年3月発行）に掲載された論文『教育学園闘争論』である。

「学園闘争の現局面はまさに、帝国主義的全社会的再編＝資本主義の社会的分業の再編と帝国主義統治機構の再編、……これの二環における闘いが、その分業の部分的、一時的麻痺を引き出し、その統治の一環を解体し、コミュニケーション的団結を萌芽的に形成するとしても、それが要求する全社会的質を全人民的政治とその団結の質として獲得し、それを、……権力をめぐる諸階級―層の闘争の一環へと統合させることによって、質的飛躍へと至らせる闘



いと指導が要請されていると言わねばならない。」

「資本制分業生産の麻痺を学園バリケードとして獲ち取り、その際の学園バリは外に向かう質を、すなわち政治闘争に統合されるべき質を持たねばならない。だが圧倒的プロレタリアは未成熟であり、生産点での強固なヘゲモニーを創出できていないから、政治闘争はまだまだ権力闘争としての性格を有しておらず、学園闘争は政治闘争に統合し尽くされない……」政治闘争と学園闘争は常に実践的には統合されぬ」（傍線―引用者）

「われわれの大学政策という形で、制度的に保障されるものとして、一つのイメージを提出し、それを実現する方向で学園闘争を展開していくことは誤りであると考えられる。何故なら、ブルジョアジーが物質的生産手段を所有している限りにおいて、物質的諸関係は資本制生産関係として存在しているものであり、プロレタリアートが自らを支配階級にまで高めなければ、社会革命は遂行されていかなないからである。……学園闘争はそれ自体の終焉を持たないのであり、常に権力闘争に統合される方向性を持たなければならぬ。プロレタリアートの政治権力奪取の日まであらゆる闘いは敗北し続けるのであり、学園闘争も又資本制そのものの廃棄を最終的課題とする。」

この論文では、三期論の問題意識としてあった、学園闘争と政治闘争の徹底化の方向性が提出されている。すなわち、学園闘争は、権力闘争に統合され資本制そのものの廃棄を最終的課題としていく。また政治闘争は、権力をめ

ぐる諸階級―層の闘争として、プロレタリアートを支配階級へと高めていく権力闘争としての性格を有していく、という方向である。

ただし、傍線を引いた部分にその限界が現れている。「政治闘争はまだまだ権力闘争としての性格を有しておらず、学園闘争は政治闘争に統合し尽くされない」―確かに、当時の大衆運動の状況それ自身への、客観的分析としては、間違っていないからである。しかしながら、問われているのは、状況をそれとして語ることはない。問題は、そうした運動状況にあっても、権力問題を核心に据えたプロレタリアートの政治を前面に押し出し、その下に、種々様々の自然発生性を結合させていく指導性である。「権力闘争としての性格」は、こうした意識的な闘いによってこそ、それ自身としては未分化な大衆的運動の中に刻印されていくのである。単に、大衆運動自体の高揚・拡大の先に、自然と現れてくるものではない。

前論文では、この点についての展開―掘り下げは、十分にはなされていない。しかしこのことがアイマイにされると、どんなに立派な闘いの徹底化の方向が提起されたとしても、それは不断に彼岸化されお題目化されかねないものである。

この後、二次ブントは、指導の転換をめぐって激しい党内闘争―分派闘争に突入していく。この中で左派潮流は非合法党建設と武装闘争に着手しはじめ大衆運動自体からは

後退していく。このため、二次ブントの学生運動―学園闘争指導の限界は、克服されないまま現在に至っている。

### 3. 政治闘争と学園闘争の結合にむけて

以上を踏まえて、政治闘争と学園闘争との結合についての、我々の基本的態度について、まとめておきたい。

最も根本的には、政治闘争であれ、学園闘争であれ、プロレタリアートを前衛とした社会革命の遂行による人類の解放という大目的に向け、闘われるべきであり、その闘いならば資本主義・帝国主義そのものへと向けていかなければならない、ということである。実際の運動がこのようなものとして現れていないということ、自らをこのような主体へと不断に打ち固めていくということは、別問題である。ここから目をそらしてはならない。

より引きつけていえば、政治闘争は、ブルジョア支配秩序を再生産する一機構としてある教育・大学を解体し、プロ独下において再組織しうるような全面的な階級的暴露を包含したものとして構築されていく必要があること。学園闘争についていえば、決して現在の再編のみに目を奪われることなく、教育・学園に内包する矛盾（民族・「障害」能力主義による差別―選別、教育内容の侵略性等々）とその階級的性格を、資本主義・帝国主義の運動の総体の中でとらえ批判すること。そして、この総体を止揚する運動に

おける政治闘争―他でもなくプロレタリアートの革命的なそれ―の特別の意義を、学園闘争の中でも宣伝・扇動することである。

政治主義と学園主義双方の止揚のためには、何よりも、プロレタリアートの革命的な政治闘争の復権と組織化が前提であり、そうした闘いの発展と条件の拡大のためにこそ、学園闘争を結合させていかなければならない。

70年代以降、階級闘争の後退局面の中で、地域住民運動、反差別闘争等、いわゆる個別闘争が一定の広がりをもって持続的に闘われてきた。学生運動においても、これら階級層民衆の闘いに連帯し、具体的な結合を求める実践が、様々な形で取り組まれてきている。

この個別闘争との結合をめぐって、新左翼諸派は、その政治の限界に規定され、種々の誤りを再生産してきている。もちろん新左翼諸派は、闘いの全国化、国家権力との実力闘争の促進という点においては、それなりに積極的役割を果たしている。しかしそれは、諸民主主義闘争・政策反対運動の配列、序列づけによるみちすじの指定といった狭い政治と結びついているが故に、政治利用や無原則・無総括のりょうつりを不断に発生させてきた。血債のスローガンは、こうした政治の貧困を精神主義をもってアイマイ化させてしまうものでしかない。

一方で諸階級民衆の闘いの広がり、一方でプロレタリアートの革命的闘争の後退という現状は、階級闘争をますます混沌としたものにしてしまっている。プロレタリアートの階級闘争に対する我々の原則的見解は、既に述べてきた。これをふまえながら、いわゆる個別闘争との結合の問題についての我々の態度を明らかにしていきたい。

ただしここでは、基本的視座の提起にとどまっている。種々の個別闘争を個別的具体的にとりあげ検討することが

面的に実現することは不可能であるが、民主主義的要求の一つ一つに関しては、一定の条件の下では、実現することは不可能ではない。

「社会主義は、二重の意味で、民主主義なしには不可能である。①プロレタリアートは民主主義のための闘争によって社会主義革命への準備をしなければ、この革命を遂行することはできない。②勝利をしめた社会主義は、民主主義を完全実現することなしには、自分の勝利を維持し、人類を国家の死滅へみちびくことはできない。」(p120)

ただし「マルクス主義は、民主主義が階級的抑圧を排除するものではなく、ただ階級闘争をいっそう純粹に、いっそう激しくするにすぎないことを、知っている。……離婚の自由が完全であればあるほど、それだけいっそうはつきり婦人は、彼女らの『家庭奴隷制』の根源は無権利ではなしに資本主義であることを知るのである。」(p118)つまりプロレタリアートにとって、民主主義それ自身が何か自己目的化されるものとしてあるのではなく、民主主義の獲得・実現は、階級闘争を発展させ、共産主義の勝利へと進んでいく政治的条件の拡大にすぎないということである。

したがって、「社会民主主義(共産主義と同義引用者)は、すべてこれらの要求(民主主義的要求引用者)を改良主義的にでなしに革命的にまとめあげ実行しなければならない。

実践的にはもとめられるが、そこまで掘り下げていないのは我々の力量の不足のためである。

### 1. 民主主義問題へのプロレタリアートの態度

まず、プロレタリアートが種々の民主主義的問題に対していかなる態度をとるべきかについて提起して行きたい。民主主義闘争―政策反対運動の延長上に革命を展望する政治が、この領域においても大きな混乱をもたらしているからである。

民族自決権の承認をめぐる論争において貫いたレーニンの態度を教訓にしていきたい。以下は全て、『帝国主義と民族・植民地問題』からの引用である。

「一般に政治的民主主義は、資本主義のうえに立つ上部構造の可能な諸形態のうちの一つにすぎない。資本主義も帝国主義も……あらゆる政治形態のもとで発展し、それらすべての形態を自分にしたがわせる。だから、民主主義の諸形態のうちの一つとその諸要求のうちの一つの『実現不能』をうんぬんするのは、理論上根本的に正しくない。」(p132)

「すべて『民主主義』とは、資本主義のもとではきわめてまれに、きわめて条件的にしか実現されない『権利』を宣言し、実現するところにある。」(p120)

すなわち、資本主義・帝国主義の下では、民主主義を全

……いっさいの根本的な民主主義的要求のための闘争を、……ブルジョアジーを収奪する社会主義革命にまで、拡大し激成しなければならない。」(p16)

だから、

「これらの要求(民主主義的要求引用者)のどれ一つとして、ある事情のもとでは、ブルジョアジーが労働者を欺瞞するための道具に役だてられないようなもの、また実際に役だてられなかったというものはない。」(p22)

ということ、すなわち、民主主義的要求の一つ一つは実現されることはあるが、しかしそれは、プロレタリアートを懐柔しブルジョア支配を安定させるための手段であるというところを見抜いておかなければならない。

そして、

「プロレタリアートは、共和制をふくめたすべての民主主義的要求のためのその闘いを、ブルジョアジーの打倒のためのその革命的闘争に従属させることによって始めて、その独自性をたもつことができる。」(p21)

ということを肝に命じておかなければならない。

「自決をふくめた民主主義の個々の要求は、絶対的なものではなく、一般民主主義的な(今日では一般社会主義的な)世界的運動の小部分である。」(p161)

ということである。

種々の民主主義闘争を闘う中で、民主主義を個別的にではなく全面的に実現し、階級の廃絶、一切の社会的差別・抑圧の廃絶まで闘い抜くことで、諸階級民衆を引きつけ領

導していくプロレタリアートの指導性をこそ、我々は、獲得し打ち固めていかなければならない。ある特定の闘争課題に対し、「帝国主義の延命の最重要環」等の位置づけを与え、その闘争の発展・徹底化に、他の諸闘争を従属させるような指導性が、種々の政治利用主義・引き回しといった現象を発生させ、プロレタリアートの権威をおとしめてきたのは必然であろう。

## 2. 政策批判―政策阻止闘争に階級闘争を狭めてはならない。

すでにふれてきたように、多くの新左翼党派は、反動政策等の闘争課題に対し、帝国主義の延命の最重要環であるという位置づけを与え、××決戦を呼号し、その政策がどれほど悪であるかという扇動を行うことで、それへの民主主義的意識を基盤とした自然発生的反発・憤激をかきたて、自己の戦略・戦術の下に組織する、という政治指導を行っている。したがって、自らの戦略・戦術の枠組みにはまっている限りにおいては、自然発生的に拝跪し、この枠組みからはずれる自然発生的性に対しては、強引に統制するか、切り捨ててしまう。

このような政治指導は、種々の政策が資本主義・帝国主義の総体的運動の一部としてあることを暴露し、資本主義・帝国主義そのものとの闘争に個々の政策との闘争を従属さ

どころか彼らは、プロレタリアート内部の対立を深化させ、分断するために、差別を政治的社会的に固定化しているのである。だから、資本制生産諸関係を根本的に止揚し、諸階級・諸階層の分裂状態を一掃していく時、一切の社会的差別をその根底から全面的に廃絶していく現実性が生まれ得てくるであろう。

プロレタリアートは、自らを階級として組織し行動すること、そうした闘いを、最後まで首尾一貫して領導しぬく能力を有しているし、その能力を全面的に発現していく世界史的任務を有している。逆に言えば、プロレタリアートの階級形成にとって、差別―被差別関係を越えた団結を形成し、差別―被差別関係を止揚していく能力を獲得していくことが、不可欠のものとしてあるということである。

階級闘争―プロレタリアートの革命的闘争を、政策阻止闘争の激化としてしか指導しえない政治は、このようなプロレタリアートの能力を全面的に形成していくという任務を遂行しえない。種々の差別現象や、国家の差別政策を弾劾し、労働者大衆の憤激を扇動することは、そのような政治においても可能であろう。また、帝国主義の危機の最重要環、との闘争に、そうした憤激を接ぎ木することもできる。しかし、そこまでである。差別を生み出す構造の総体を暴露・批判し、これとの闘争に労働者大衆を導いていくことができない。日帝打倒なくして差別からの解放はない、という教条を無内容にふり回し、主に国家の政策をめぐるものとして狭くとらえられた「階級闘争」への

せるというプロレタリアートの態度を忘れてしまったものである。資本主義・帝国主義が、生産諸関係を基礎として存立し、再生産されているということ、そして諸政策は、その上部構造としての国家の活動の一部にすぎない、という唯物史観の基本的把握を實踐において貫き通すことに失敗しているのである。

これらの誤りは、種々の社会的差別に対する態度においても、様々な混乱を生み出している。

資本主義社会は、自由・平等を標榜しながら、実は、種々の社会的差別を構造的に再生産している。それは、根本的には、資本主義社会―資本制生産関係の下で、ブルジョアジーとプロレタリアートの利害は対立しており、プロレタリアートはブルジョアジーへの隷属を強いられていることと、さらに、プロレタリアート内部においても、大・中・小企業労働者、半失業者、失業者等々に階層分化しており、この資本主義社会を前提とし、その中で、自己の労働力を少しでも高い商品として売ろうとする即時的意識にとどまる限り、相互の競争・対立関係から抜け出せることはできない、ということを基礎にしている。人類が、諸階級・諸階層に分裂し、民族・国境等の枠組みにしばられながら、互いに反目しあうような人間関係―社会関係をしか形成していないことが、種々の社会的差別を構造化し再生産している根本的要因なのである。

したがって、このような資本主義社会の存続を利害とするブルジョアジーには、差別を廃絶する能力がない。それ差別との闘いの従属・結合を主張するいわゆる「階級還元主義」、すなわち政治利用主義が、ここでも再生産される。「階級還元主義」は、実は、階級闘争の強調―差別問題に対してプロレタリアートの階級的観点を貫き通すことによって生み出されるものではなく、その階級闘争観の狭さ・貧困さによって生み出されるものに他ならない。

## 3. プロレタリアートの革命的現実を打ち鍛えよう！

種々の個別闘争が広がりを見せていることが事実であれば、そうした闘いが、さまざまなきづまりを見せていることも事実であろう。我々は、このことを何よりもプロレタリアートの指導性・前衛性の未成熟、プロレタリアートの革命的政治・組織の未成熟としてとらえ返さなければならぬと考えている。

革命をめざす政治・組織の限界の種々の現れを指摘し、批判することは難しいことではない。しかしそれを、主体的に引き受けること、そしてその限界を生み出す根拠を切開き一歩でも克服していくことは、きわめて困難なことである。だが我々は、ここから目をそらすことはできない。

諸階層民衆の具体的闘いと、具体的に結びついていくこと、それは欠かすことのできない実践である。しかしそこにとどまっていることはできない。プロレタリアートを、階級の廃絶まで断固として闘い抜く鉄の階級へと打ち鍛え

ていくことに、そうした闘いを結実させていくことが、全ての活動家に問われているのである。

△最後に▽

我々が以上、提起してきたことは、原則レベルのものにとどまっております、多分に抽象性を有している。我々はこのことを否定しない。しかしながら、種々の大衆運動が、それぞれの具体的闘いの現実において、つきあっている限界やいきづまりを克服していくためには、我々の提起しているような原則的態度を堅持し、貫くことが不可欠であるということも、我々は確信している。

もちろん、ここで述べた我々の主張それ自体が、すぐにそのまま、大衆運動の具体的実践に貢献しうるものであるとは、考えることはできない。このことを忘れ、原則的正しき、をふり回してしまふなら、それは、生きた現実に対する生きた態度として貫かれることのない、死んだ教条の押しつけへと転落してしまふであろう。

我々は、そのような誤りを何度も見てきたし、自らもそのような誤りを犯してきている。

しかしながら原則的な領域をめぐる混乱は、共産主義を彼岸へと押しやり、階級闘争、という言葉すらお題目にしていく傾向を不断に再生産している。この中で、一方で貧困なセクト政治が横行し、また一方で、これに包摂されない種々の運動が、分散と混乱の状態から脱却しえないでいる。これもまた否定できない現実である。

この状況に対し、作風、等を対置しても無力である。もとめられているのは、現実を止揚する運動としての共産主

義の復権、そのための理論と組織の獲得であり、ここにこそ根本的課題が存在しているのである。

この課題との格闘・経験の蓄積を通してこそ、種々の自然発生性、動揺性を克服し、確固たる土台のうえに自らを立たせ、プロレタリアートの単一の闘いとその発展へ学生運動を結合させていく力を我がものとすることが可能となる。自覚的活動家の精力を、他でもなくこの任務へと集中していくことが、現在の階級闘争の具体的現実からの要請であり、それへの実践的具体的な解答であると、我々は考えている。

我々は、そのためにこそ、多くの活動家諸君との可能な限り公然の討論・論争を展開していきたい。理論・政治的内実の後退・貧困という現実に対応して、公然の論争を避け、レットテル貼りや誹謗・中傷の類いをもって批判したつもりになり、かたずけてしまうという傾向が広がっている。こうした状況と、断固として訣別していかなれるよう、全ての活動家諸君に心から呼びかける。

階級支配の、さらに種々の社会的差別・抑圧の廃絶に向けた、いかなる闘いをも、したがってその誤りをも、自らに問われた主体的問題として引き受け、プロレタリアートの全世界の獲得に向けた闘いの前進へと血肉化していく態度をこそ、我々は身につけていかなければならない。

我々は、討論・論争の中で、自らの弱さを対象化し切開する作業を、積極的に進めていきたいと考えている。そしてそうした活動の蓄積を、緊密な組織的協働をもって、階

級闘争の一翼を担うことを可能とする学生活動家の政治組織の建設へと結実させていくことを目標としている。

学生運動の階級の発展と、階級闘争総体の発展に向け、共に闘い抜こう！

引用書——『ドイツ・イデオロギー』——合同新書

『ゴータ綱領批判』——岩波文庫

以外は、国民文庫

